

# Vol. 1



# C O N T E N T S

<b>Prologue</b>	◎ はじめに .....	4
<b>Episode 01</b>	◎ 自分たちは、損した世代？ .....	6
<b>Episode 02</b>	◎ 若い世代は、軟弱者か、それとも……？ .....	16
<b>Episode 03</b>	◎ 若手と戦うべきか、否か…… .....	24
<b>Episode 04</b>	◎ フリーライダーの憂鬱 .....	32
<b>Episode 05</b>	◎ 会社の役に立つということ .....	42
<b>Episode 06</b>	◎ ミッドライフクライシス .....	52
<b>Episode 07</b>	◎ プライドと現実の狭間で .....	62
<b>Episode 08</b>	◎ 夢見る少女じゃいられない、が…… .....	72
<b>Episode 09</b>	◎ 無気力症候群 .....	82
<b>Epilogue</b>	◎ 40代・50代の未来 .....	92

## はじめに

『最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるでもない。唯一生き残るのは、変化できる者である』

ご存じの方も多いと思いますが、これは進化論で有名なチャールズ・ダーウィンの言葉です。したがって、これはもちろん、生き物の進化について語られたことです。

ですが、この言葉は不気味なほどに、ビジネスマンにもピッタリと当てはまるように思われます。唯一生き残れるビジネスマンとは、強い者でも賢い者でもなく、変化できる者なのではないでしょうか。

変化できる者とは、言うまでもなく、環境の変化に合わせて自ら変化できる者、という意味です。ビジネスマンを取り巻く環境の変化は、スピードを増すばかりです。それに合わせて自らを変化させなければ、生き残れません。

こんなことは、わざわざ言われなくても、大半の人は分かっていると思います。しかし同時に、変化に対する反発を感じている人も少なくないでしょう。

「いまさら変化することなんて無理だ」

「自分は変化しなくてもやっていける」

このように思っている人もいらっしゃることでしょう。あるいは逆に、「自分は十分に変化している」と思っている人もいらっしゃるに違いありません。人はそれぞれ、置かれている環境が異なっていますし、抱えている問題も違ってきますから、色々な意見があるのが当然です。

いずれにしても、40代から50代にかけては、ビジネスマンとしても、一人の人間としても、大きな転換期と言えるでしょう。みんなと一緒に上を目指してがんばっていれば良かった時期は過ぎ、自力で自分にとっての新たな目標を見つけ出さなければならない時期に突入します。そうするためには、自分の周囲と自分自身を、しっかり見つめ直す必要があります。

この講座は、そのきっかけの一つとなることを目的としています。テキストは小説形式で、色々なタイプの40代後半の人たちが登場します。ご自身と似た人もいるかもしれませんが、いないかもしれません。ですが、同年代のお知り合いに似た登場人物は、一人くらいはいるのではないかと思います。

仮に一人もいなかったとしても、みなさんと同年代の登場人物たちによる様々なエピソードで構成されています。どこかで聞いたことのあるようなエピソードばかりだと思ひ

ます。今はご自身には関係ないことが多いかもしれませんが、いつか関係することになるかもしれません。もしかしたら、ご自身は永遠に直接関係することはないかもしれませんが、間接的に関係する可能性は低くないはずです。

ですので、そういう気持ちでお読みいただき、自分の事として考えるきっかけにしていただければ、幸いです。

## 自分たちは、損した世代？

突然のざわめきで、せっかくの安眠を破られた。渡辺正太郎は、不機嫌な顔で窓の外を見渡す。出張先の浜松から乗ったこだま号が、熱海のホームに停車しているところだった。ざわめきの正体は、すぐに分かった。温泉旅行の帰りらしき老人たちが、大挙して乗り込んできたのだ。彼らは自分の指定席を見つけると、準備万端に用意していた缶ビールをビニール袋から取り出し、さっそく宴会を開始した。

いい気なもんだな。

正太郎は、心の中でつぶやいた。本当は改めてもう一眠りしたいところだったが、老人たちの声がうるさくて、眠れそうになかった。

「いやあ、あの旅館は当たりでしたな」

「料理が最高だったね」

「露天風呂も広くってねえ」

「寿命が10年は伸びたんじゃないか？」

「アッハハハハー」

いい気なもんだな。

正太郎は、再び思った。彼はこのところ、老人たちの世代と自分たちの世代の違いについて、考えることが増えている。あと数年で50歳になろうという年齢である。自分ではまだまだ若いつもりでいたが、そうではないということに最近気付かされた。

早期退職制度。数週間前、3年ぶりに発表になった。以前までのものは、50歳以上が対象者だった。しかし今回は、45歳以上となっていた。つまり、正太郎自身も対象者なのだ。

正太郎が勤める電機部品メーカー業界は、ここ数年、どこの企業も業績が急激に悪化している。韓国や中国の企業との価格競争が厳しく、業績が回復する見込みはない。そのため、どこもリストラを繰り返している。

しかし正太郎は、自分が早期退職制度の対象となることなど、まだ数年先のことだと思っていた。だから、その時になったら考えれば良いと、半ば無意識のうちに言い訳し、先送りをしていた。

それが突然、そんなことはしていられなくなった。早期退職は、あくまでも自主退社なので、このまま会社に残ることは当然できる。しかし、残っても、年収が現状よりも上がることはほとんど期待できない。それどころか、減る可能性も十分にある。退職金だっ

て、どうなるか不安だ。それに対して、早期退職に応じれば、なんだかんで約2千万円が支給される。とはいえ、退職したとして、再就職先が見つかるかと考えると、40代後半のしがない営業マンである自分のことを中途採用してくれる会社など、頭に思い浮かばなかった。それに、一念発起して独立などということは、ずっとルート営業しかしてこなかった正太郎にとっては、まるで現実味のないことだ。

正太郎の役職は、課長代理という曖昧なものである。実質的には、何の権限もない。そして、もうこれ以上の昇進は期待できない。要するに、大半の社員と同じで、そこそこに出世し、そこで終わったわけである。このまま会社にしがみついていると、いつか追い出し部屋に送り込まれてしまうかもしれない。

娘は、まだ高校生だ。それに、20年近く前に無理して買ったマンションのローンも、まだまだたっぷり残っている。働かないという選択肢は、ありえない。

そこで思い出したのが、20代の頃に上司だった草津のことだった。草津は、もう15年くらい前に定年退職していた。草津とは年齢が離れていたが、大学の先輩・後輩の仲だったことで、特に親しくしてもらっていた。そのため、定年退職以降も、年賀状のやりとりだけは続けている。

草津からの年賀状の内容は、毎年同じだ。草津は定年退職後、田舎に引っ越して、農家の真似事を楽しんでいる。それを自慢するように、毎年の年賀状の写真には、自分の畑で妻と二人でニッコリ笑う姿があった。

草津がそんな老後を送れるのは、順調に昇進・昇給し続け、住宅ローンを早期返済していたからだ。しかも、あの頃はまだ、退職金もバッチリ出た。だから、完済したマンションを売却し、田舎に引っ越すなどということができたのだ。しかも、彼らの世代なら、年金が破たんする心配もないだろう。

それに比べると、自分たちの世代は、貧乏くじを引かされているとしか思えない。若い頃は、まだ年功序列型の人事制度が生き残っていた。まさか年功序列が崩れるとは、一瞬でも想像したことがなかった。だから、若い頃は安い



給料で、それこそ馬車馬のごとく働かされても、我慢できた。いつかは自分も必ず昇進し、現場を駆けずり回らなくても、そこそこの給料がもらえる立場になれると信じていたからだ。

それが、どうだ。自分たちが管理職に上がる前に、年功序列は崩れた。大半の社員は、課長にすらなれないままに終わる。さらには、定年まで会社に残れるかどうかすらも、危うい。

自分たちが若かった頃に散々働いた結果として出ていたはずの利益は、自分たちではなく、その上の世代の社員の給料になっていた。彼らが今、おもしろおかしく暮らしているのは、自分たちが稼いだ利益のおかげだ。

正太郎は、ビールで顔を真っ赤にしている老人たちを睨み付けた。老人たちは、大口を開けて、幸せそうに笑っていた。それを見て、正太郎の機嫌は、ますます悪くなった。

とはいえ、実は正太郎もうすうす分かってはいた。あの世代の人たちが悪いわけではない。本人たちだって若い頃は、安い給料で働かされていたのだ。ただ、彼らは年功序列の時代の中で、引退できたというだけなのだ。要するに、彼らは運が良く、自分たちは運が悪かったというだけのことなのである。彼らを恨むのは、筋違いだ。

それにしても、と正太郎は思う。彼らの時代は右肩上がりの経済で、大半の企業がどんどん巨大化していった。だから、どんどん部署が増え、それに伴って役職のポストが増えた。そのため彼らは、順調に出世できた。ところが今は、部署など増えるわけがない。むしろ減る傾向にある。それに加えて、組織がフラット化してきた。役職のポストは減るばかりである。これでは、いくら真面目に働いたって、出世などできるはずがないではないか。

それに、住宅のこともある。彼らの世代が住宅を購入した頃は、まだバブル前で、さほど住宅の価格は高くなかったはずだ。一方、自分たちがマンションを購入したのはバブル崩壊後。不動産屋から「もう底値ですよ」、「今が買い時ですよ」と言われて買ってみたいものの、その後もどんどん値下がりした。住宅ローンの金利だって、今から考えたら恐ろしく高かった。

そう思うと、今の若い世代だって、自分たちよりは恵まれている。マンションの値段も、住宅ローンの金利も、かなり下がった。共働きが増えているので、世帯年収は自分たちよりも上だろうから、さほど無理なく買えるだろう。自分たちが結婚した頃は、共働き



など考えもしなかった。それは、年功序列だったので、自分一人が働いていれば普通に暮らしていけるだろうと思ったからだ。それに、今の若い社員は、馬車馬のごとく働かされているわけではない。自分たちが若い頃は、大半の企業が、今でいうところのブラック企業だった。毎日の残業や休日出勤など、当然のことだった。今は、まともな企業なら、そんなことはない。

上の世代も下の世代も、自分たちよりも色々と得をしている。自分たちの世代だけが、損させられているとしか思えない。生まれたタイミングが違うというだけで、こんなにも人生が変わってしまうことに、正太郎はどうにも納得がいなかった。

これまでは、ここまでじっくりと考えたことがなかった。新幹線の中での貴重な睡眠時間を老人たちに邪魔されたおかげで、腰を据えて考える時間ができた。そのおかげで正太郎は、自分たちの世代だけがとことん運に見放されているという思いを、ますます強くすることになった。

「ただいま」

「おかえり」

正太郎が自宅に帰ると、娘の綾香がリビングでテレビを見ていた。テーブルには、ラップをかけた皿がいくつか置かれていた。それらを電子レンジで温めて食べる、ということらしい。

正太郎のいつもの帰宅時刻は、9時より早いことはほぼない。今日はお出張先から直帰したので、まだ7時過ぎだ。

「お母さんは、パートか？」

「そう。今日は遅番」

妻の美枝子は、近所の24時間スーパーで働いている。遅番の日は、帰りが8時半くらいになるので、パートに出る前に夕飯を作っておくことになっている。

部屋着に着替えて、リビングに戻る。テレビにはクイズ番組らしいものが映っていたが、正太郎が知っている出演者は一人もいなかった。

「綾香、お前はもう食べたのか？」

「まだ」

「お父さんは食べるけど、お前の分も温めるか？」

「うん」

出張から帰ったばかりの父親が、家でテレビをずっと見ていたらしき娘の食事も温めてやるのは、どうなんだとは思う。どう考えても、逆だろう。しかし現実的には、娘が「お父さん、ご飯すぐ食べるなら、温めてあげるよ」などと言うわけがない。

もう、そういう時代ではないのだ。子供が親を敬うなどという価値観は、すっかり壊滅した。最近の親はだらしが無いなどと言う人もいるようだが、そうではない。親子の関係だけではなく、年下が年上を敬うという価値観がなくなったのだ。

昔は、相手が一つ年上だというだけで、敬語を使わなければならなかった。平等という意識が進んだせいで、そういう習慣がなくなったのだと考えれば、悪いことではないと思う。しかし、行き過ぎれば、どんなことでも問題がある。

会社でも、部下が上司のことを敬っていたのは、いつの頃までだっただろうか。今でも、部長以上に対しては、社員たちは尊敬の念を持っているだろう。しかし、課長代理の自分のことなど、新入社員だって何とも思っていないに違いない。

そういう意味でも、上の世代はツイていた。たとえ表面上だけだったとしても、少なくとも年下からは敬語を使ってもらっていた。今の若い世代は、きちんと敬語を使えなくても、大目に見てもらえる時代になった。自分たちの世代だけが、若い頃には敬語について叱られたのに、自分が年上になってからは若手からまともな敬語で話してもらえない。つくづく損な世代だ。

そんなことを考えながら、正太郎は無言でラップのかかった皿を電子レンジに入れ、温まったら次の皿を温めるという作業を続けた。次に、炊飯器から綾香の分のご飯を茶碗に盛った。自分は、ご飯は後回しにして、まずはビールだ。

「綾香、できたぞ」

「んー」

綾香は気だるそうにテーブルにつき、「いただきますーす」と言って食べ始める。一呼吸遅れて、正太郎も「いただきます」と言って、缶ビールをプシュッと開けた。面倒なのでコップに出さずに、缶から直接飲む。テレビはつけたままだが、綾香はそちらを見ずに、食事をしている。

「綾香」

「ん？」

「テレビ、見ないのか？」

「んー」

どうやら、どうでもいい番組だったようだ。正太郎は、テレビを消そうとして、リモコンに手を伸ばしかけ、途中で思いとどまった。娘と二人きりで食事をしている状況で、テレビを消したら部屋が静まり返ってしまう。普段ほとんど娘と話す機会がないのだから、こういう時こそ何か話せば良いのだろうが、静まり返った中では余計に話しにくい。そう思ったのである。

いずれにせよ、無言のままというのは、不自然だ。いつもは美枝子がいるので、正太郎が話さなくても間が持つ。しかし、今は自分と綾香しかない。そして、綾香の方から話しかけてくることは、ほぼ期待できない。となると、自分が綾香に話しかけるしかない。ならばと適当な話題を考えてみるが、気の利いたことは何一つ思いつかない。数秒の沈黙の後、テレビの画面が目に入った。

「あの番組、人気あるのか？」

「別に、フツーじゃない？」

「……そうか」

これでは会話が続かない。仕方なく、テレビを見る。素人っぽく見える若者が、素人っぽくことを喋っていた。しかし、どうやら彼は、番組のレギュラーらしい。ということは、そこそこ売れているタレントなのだろう。自分が子供の頃は、テレビに出てくるタレントたちは、明らかに素人とは違っていた。売れているタレントたちは、プロ中のプロばかりだった。

「今の若者は、気楽なもんだな」

正太郎は、無意識につぶやいた。それに対して、綾香が眉をひそめたのだが、テレビの方を見ていた正太郎は気づかない。

「あんなふうに、ただ騒いでるだけで、何百万円ももらってるんだろなあ」

「あのさ」

「あ？」

「あれって、ただ騒いでるだけじゃないよ」

「じゃあ、なんなんだ？」

「リアクション芸だよ」

「なんだ、それ？」

「知らないの？ じゃあ、話になんないよ」

「なんだよ。教えてくれてもいいだろ」

「だから、芸の一種だよ。すごく練習してるんだよ」

「あれが、か？」

正太郎には、どう考えても芸には見えなかった。それで、間拔けな返答をしてしまった。

「そうだよ。それに、今の若者は気楽じゃないよ。ハッキリ言って、すごく大変だよ」

「大変？」

「そうだよ」

「どういうことだ？」と正太郎が頭を働かせた瞬間、一つのことが思い浮かび、背筋が凍りついた。

「まさか綾香、お前、イジメにあってる、とか？」

「違うよ。それっぽいことは、子供の頃はちょっとだけあったけど、今はないよ」

「じゃあ、何が大変なんだよ」

とりあえず、ほっとしながら聞き返した。

「色々だよ」

「色々って、例えば？」

「そうねえ。例えば、LINEにソッコーで返事しなきゃいけない、とか」

「そんなの大したことないだろ」

「大したことあるよ。一日に何件来ると思ってるの？」

想像がつかなかった。

「……そんなに来るのか？」

「イチイチ数えたことないから正確には分かんないけど、分かんないくらい来るってことだよ」

「確かに、大変そうだな。でもさ、やっぱり、今の若者は気軽だよ。お前はまだ働いたことがないから、分からないだろうけどな」

正太郎は、会社の若手社員たちの様子を思い浮かべていた。彼らは仕事でも、スマホを手放さない。会議中も、スマホを操作している。注意すると、「クライアントからのメー

ルに返信しているんです」と言うが、そればかりではないだろう。どう考えても、私用のメールも含まれているはずだ。と言うか、私用の方が多いに決まっている。そんなことを考えていたら、思わぬ返答があった。

「何言ってるの？ 働いたことないから、大変なんじゃん」

「は？ それって、どういう意味だ？」

本当に、意味が分からなかった。

「だって、これから就活しなきゃならないってことでしょうか？ お父さんたちの時代は、バブルで簡単に就職できたらしいけど、今の若者は大変なんだよ。お父さんたちの方が、全然気楽だったじゃん」

そう言われれば、その通りだった。

「それにさ、お父さんたちが若かった頃は、景気が良くて、毎年給料が上がってたんでしょ？ それに、ボーナスもたくさん出たって、この前テレビで言ってたよ。私たちなんて、就職できたとしたって、ボーナスなんかどうせちょこっとしかもらえないよ。こんなじゃん、就職する前から、やる気なくなるよ。これって、私たちのせいじゃないよね？ 今働いている人たちのせいじゃないの？ 自分たちは若い頃に、たくさん給料もらってたのにさ」

「……確かに、そうだな」

「そうだよ。お父さんたちの世代は、恵まれてるんだよ」

「いや、待て。それだけは誤解だ。お父さんたちの世代だって、損してるんだよ」

「どこが？」

正太郎は、出張帰りに新幹線の中で考えたことを、綾香に説明した。つまり、自分たちの世代が、上の世代に比べ、いかに損をしているかについてだ。それに対する綾香の返事は、こうだった。

「それって単なる自己チューじゃん」

「自己チュー？ どこがだよ」

「だってさ、おじいちゃんは、子供の頃、戦争を経験してるじゃん。空襲が怖かったって、私、聞いたことあるよ。それにさ、あばあちゃんは戦後生まれだけど、子供の頃は食べ物も着るものも他のものも何にもなくて、すごく貧乏で大変だったって言うじゃん。それに、ほら、なんだっけ？ 団塊の世代って言うんだっけ？ とにかく、人数が多かつ

たから、学校の教室も足りなくて、受験とかも競争率がすごくて、とにかく何をするのも競争で大変だったらしいじゃん」

「……なるほど」

返す言葉がなかった。

「それにさあ、お父さんはさっき、仕事は大変みたいなこと言ってたけどさ、そもそもお父さんは仕事が好きだから、やってるんじゃないの？」

「何言ってるんだ。仕事は大変に決まってるだろ」

正太郎は、ここだけはなんとしても反論すべきだと思った。しかし、その反論は、あっさりとねじ伏せられた。

「そりゃあ、ちょこっとバイトしているだけの私だって、それなりに大変だと思うんだから、毎日毎日、朝から晩まで働いている人は、すごく大変なんだろうなって思うよ。でもさ、お父さん、新しい家電が出ると、いつも嬉しそう教えてくれるじゃん。今度出たヤツは、こんな機能が付いてて、こんなに便利で、こんなにすごいんだ、とかってさあ。お父さん、家電が好きなんじゃないの？ 私、お父さんは家電が好きだから、仕事も好きなのかと思ってたよ」

今度こそ、ぐうの音も出なかった。図星だったのだ。些細な不満にばかり目を奪われていたせいで、正太郎自身はすっかり忘れていた。

「お父さん、本当は仕事、嫌いだったの？」

「いや、そんなことはない」

「なら、いいじゃん」

「そうだな。お前の言う通りだ」

そう言って、正太郎は、缶ビールの残りを一気に飲み干した。

「なあ、綾香」

「ん？」

「お父さん、もう1本ビール飲もうと思うんだけど、お前もちょこっとだけ付き合わないか？」

「何言ってるの？ 付き合うわけないじゃん。私、まだ高校生だし」

「そう、だよな」

「そうだよ。じゃあ、ごちそうさま。私、勉強するから、洗い物よろしくね」

そう言い残して、綾香は足早に自室に向かった。一人残された正太郎は、冷蔵庫の缶ビールを取るために立ち上がった。

